

そう思い緒岸は後半思考を巡らす。ふりをしながら通学路を歩く。だんだん生徒が別れて行き閑散とした通学路になってきた。

そもそも時間が時間であり、気がつくとき暗い夜道彼女と二人しかいなかった。

彼女と別れる地点に着くと、彼女が目をキラキラとさせながら振り返ってくる。自分のできる限りの演技で、頑張つて了承した空気感を出す。

「わかった。近いうちに作戦を練ろう」

「さっすが。じゃあ準備しましょうか」

飛び跳ねるほど嬉しいのが全身から伝わってくる。珍しく手を振りながら別れの挨拶をしてきた。そつと緒岸も手を振り返し、別れた。

緒岸は自分の心に一抹の期待感があるのを感じた。

「ただいま」

緒岸が玄関を開けた時、珍しく祖父と目があつた。

「おう、帰ったか、夕食を食べたら俺の部屋に來い」

「はい」

緒岸は忘れていたのではつとした。たまに話があるからと言ってくる事はあるが、2度も念押しをされるなんて事は結構稀だ。

遺産？ 勉強？ 思考を巡らし様々な可能性を考える。悪い話か、良い話かを考えていると部屋の外から

「ご飯できたよ」

と思考を中断する声が聞こえた。考えるだけ無駄か、と蒼は夕食を取りに部屋を出た。

食卓に着くと母のみで祖父の姿はなかった。外にいるらしい、先ほど玄関であつたのは偶然外にでるタイミングだったと言っただけだった。

特にへんな話ではないのではないかと少し安心し、箸が進む。今日の魚もいつもと同じで美味だ。

夕食を食べ終え、片付けを終えるとそのまま祖父の部屋へ向かった。

いつもは高く閉じられている襖を開ける。緒岸がこの部屋に入るのは何年ぶりだろうか。

幼少の頃は何度か入った記憶があるが、遠い過去の話であり今の状態は全くといっていいほどわからない。

特に入るなと言われているわけではないが、入る理由がないというだけで気がついたらこの歳になつてしまったというだけである。

中に入ると畳と古臭い匂いが鼻をかすめた。中央の明かりが暗い空間を照らしているが、部屋全体を明るくするには力不足を感じざるおえない。壁の真下などは明かりが届かず、真つ暗だ。緒岸は真つ暗な中に何かある事を感じ取つた。